

# 保育の一日(3)

## ——存在世界としての保育——

津守 真

今回のこの連載のシリーズを、私は、前回の「保育の体験と思索」で行った考察の前提にある保育の実践を明瞭にすることを課題として書きはじめている。実際の保育の中で体験する具体的な現象の考察は、私にとって最も興味深い保育研究である。しかし、今回はそれをしばらくおいて、生きた現象を生み出す保育の実践を、保育者の側から明らかにしてみたいと思っている。

実践の第一の主題として、出会うことをとり上げた。前回は、1、出会うことから保育がはじまること、2、他者としての子ども、3、語義から考えることについて記し、今回はそのつづきである。

### 一、出会うこと(つづき)

#### 4 先人観を取り去って見ること

幼い子どもにふれるとき、私どもは、自然におとなの固い殻をとり除かれて、人間に立ち返ることができる。これは幼児がもつ力である。

そんな幼児の前において、私共はしばしば自分の考えで頭がいっぱいになると、子どもと出会えなくなってしまう。おとなの心の

中にある先入観や枠をとり去る努力がおとなの側に必要になるのである。

ルードイッチ・クラゲスが、現象をそのままに見ることができなくさせる眼がおとなの中にあることを述べ、物を見る目の基礎にある知覚の担い手について論じている個処に記されている有名な神話がある。真夏のある日中に、森の中を二人の男が散策している。一人は熱情的な風景画家であり、他の一人は同様に熱情的な建築業者である。同じ森の中にいながら、二人は別のものを見ている。「画家は幹の形態、風にそよぎ、日影洩る木の葉の繁み、それを縁取る青空に点する遠くの白雲などに魅せられているのに対し、建築業者は一瞥しただけで、地面の概測的広さ、伐採しうる木材の売り値、住宅街の建設用地、鉄道計画につれて騰る地価其の他に關して、十分に電撃的な評価を下すに足るほどである。即ち前者では樹林の性情の一面を『現象』させる感知形象が生れたのであるが、後者は感知形象を素通りして、それと同名の物が役立てられる目的を知覚しているのである。」(注1)画家は、森の本質をあらわす現象を感知しているが、建築業者は利害關係を伴う目的だけを見ていて、森そのものを見ていない。それは「概念的知覚」であって、その「概念の殻を打ち破る見込みは、それ自体本来既に運命的恩恵の事柄」なのであるけれども、それがなさ

れないと、現象をそのままに見ることはできず、そのものの本質にふれることはむづかしい。

同様のことが保育の中でしばしば起る。同じ子どもと何度も顔を合わせていても、心がかみ合わないとき、私共の心の中にある概念の殻や、無意識の前提が、その子どもをそのままに見ることを妨げることが多いのではないかと思う。その日の予定や計画で頭が一杯になっているとき、特定の理論の枠に合わせて子どもを見ようとすると、善悪、正常異常などの規準をもって見て、その相対性に気づかないとき、その観点からしか子どもを見ることができなくなる。子どもの方から見れば、自分が心から望んでいることにこたえてくれないおとなとしか映らないであろう。子どもにふれるとき、保育者は、いろいろの自分の考えがあっても、できるだけ心を透明にして、子どもをありのままに受けとるようにつとめる必要があると思う。

こう云っても、私共は、自分の眼を完全に透明にすることは到底できない。そのことを気づかせられるのもまた、子どもとふれる時である。どうしても出会うことがむづかしい子どもがいるとき、おとなが偶然にころんで床に倒れ、子どもが上から見下ろしてはじめてにつこりと笑ったことからつき合えるようになることもある。普段はおとなが子どもを見下しているのに、偶然の機会

に上下の位置が逆転することによって、それまで子どもと対等の位置でつきあえていなかったことに気付かされるのである。

また、しばしば他の子どもの髪に手をかけたとき、私と子どもと目の日に、傍にいた子どもの髪に手をかけたとき、私と子どもと目があった、私はその子の方に向き直って遊んだ。そのときから、その子どもと応答してつき合うことができるようになり、その子どもはもはや他の子どもの髪を引張らなくなった。髪を引張る子どもときめて見ていたおとなの見方が破れたときに、子どもとの間に別の関係が生れたのである。

おとなと子どもとは、身体の大きさ、位置関係、力、経験の量などが違っていているのは、存在そのものもっている相違である。そして、大きい者が小さい者を、強い者が弱い者を守るようになっているので、おとなも子どもも安定して生活できる。おとなと子どもとはいろいろの点で異った役割をとるけれども、同時に、おとな子どもという区別をはなれて、人間として出会い、交わることでできる存在である。日常の区別が逆転する危機的な機会に、両者がそのことを発見することがしばしばある。この瞬間があることによって、人と人とが出会うのであり、私共はその機会を逃さないようにしたいと思う。

おとなの存在に伴う先入観について述べたが、教師と子どもの

場合には、教師という社会的役割に伴う先入観が付加される。教師という社会的役割があるので、幼稚園や学校の組織と人間関係が保たれるのであるが、他方、子どもと直接にふれる保育の現場では、ただのおとなと子どもとの関係になるものであり、そのことが教師の役割の重要な内容でもある。おとなと子どもとの関係には、それをこえて、人間と人間との出会いがあることをすでに指摘した。人として出会うことがなければ、教師という仕事は成り立たないともいえる。とくに幼児は、だれであろうと、出会うことのできる人に信頼を寄せ、交わり、その人を通して成長する。幼児と出会うところでは、人は真に人間となることを求められているのである。

親についても同様のことがいえる。親は生物的、運命的に子どもと結びついている点で、社会的役割としての教師とは異なる。しかし、この場合も、人として子どもと出会うことが、親の課題として存在しているのであると思う。親にとっても、子どもは未知の世界をもつ独立の人間である。この認識を失うと子どもを支配する存在となりやすい。親のまた子どもの世界に人間としてふれることによって、自らも学び成長してゆく点で、他の保育者とかわらない。

おとなは、それぞれ、自分自身のさまざまな問題をになった存

在であり、それがいろいろの形で子どもに反映されて、先在観、先入観、偏見などになるが、子どもと直接にふれるところでは、それを克服することが課題となるのであると思う。それによって子どもと出会うことができるようになり、また、子どもと出会うことによって、より大きな心になれるのである。このような機会が日日与えられていることは、保育にたずさわる者のもつ特権である。

## 5 偶然と意志

子どもと出会う機会は、おとなにとっては、思いがけないときに、向うからくる場合が多い。予期しないときにくることを、どのように受けるかということがおとなにとっての課題である。

朝起きたとき、まだ心の準備ができていないときに、思いがけない仕方では子どもは私共に向ってくる。また、幼稚園で、朝、最初にどの子どもと顔を合わせるかは、あらかじめ知りがたい。朝、偶然に子どもと出会ったところで、腰をすえて交わることから一日の保育ははじまる。子どもの側から云えば、おとなから受けとめられてはじめて、その一日を自分のものとしてはじめることができる。

偶然に意味があることを認識して、それにこたえてゆく意志をもつことである。受けるということは、受動的で消極的なことと考えられやすいが、子どもと関係なしにおとなの意図を進めるよりも、ずっと積極的、意志的な行為である。

子どもと出会うことは、こちらから求めて得られるとはかぎらない。向うからくる機会を待たねばならないから、その点では受動的である。しかし、出会う偶然がかならずあることを予期し、その機会をねらっているから、その点で意志的な行為である。(注2)

おとなの意図の中にはいりきれない偶然のできごとが起るからこそ、私共は、自分とは異質な他者をふくめた、生きた現実の世界の中に身をおいていることがわかる。その中で、それぞれの子どもが、自分の最善を実現できるようにするところに、保育のほたらきがある。それには、保育者が偶然を受け入れて、それぞれの子どもと出会うことが求められる。そこからはじまって、子どもも応答し、交わってゆくことによって、子どもは自分の活動をつくり上げてゆく。このことは後の項でふれる。

## 6 出合いについて書物から考えたこと

出会うことについて、保育の中のこととして著わされた書物はほとんどない。出合い一般について書かれたものについて、私が学んだことの中から一、二を記したい。<sup>(注3)</sup>

最近私が手にしたポイテンダイクによる「出合いの現象学」(F. J. J. Buytendijk: Zur Phänomenologie der Begegnung)という論文が、エラノス年報(一九五一)の中にある。ポイテンダイクは、すでに故人であるが、オランダの現象学的教育学者として活躍した人である。これは甚だ難解な論文であるが、その出合いの考察にあたって、彼は甚だ難解な儀式における出合いから出発する。宗教の儀式における人と現実との出合いが教育とどのように関連するか、十分に理解できない点があるが、そこからはじまって、出会うという事態の中で、他人という底知れない淵の彼方にある神秘的な存在が自らの本質をあらわすという。その他人というのは、自らの自由に根ざした存在であり、その人のもつ運命以外には束縛されない存在である。

このことは、保育場面において子どもと出会うときにも、私共は認識しうることである。

人間生活の多様な場面における出合いについて、より立ち入って研究し、そのできごとの意味を問うときには、学問的な決断を必要とするとは彼はのべる。すなわち、実証科学思考の様式をすすめること、そして、出合いと名づけられるできごとを、客観的に連関し合った知覚世界の断片として理解することをやめることが要請される。「われわれは、出合いを多くの現象の中のひとつとして、すなわち、人間の行動を断片的に傍観者の立場から記述した事実のひとつとして見ようとはしない。そうではなくて、われわれの存在がそれに出会う人々の存在と結合されるその存在関係を選ぶことを決意し、この結合においてのみ、出合いにおいて人間の固有の本性の理解が可能になることを確信する。」と彼は云う。「われわれは、生の現象と社会過程のいわゆる客観的観察者という存在関係の形式から意図的に身をそむけることによつて、はじめて、われわれ自身のものとしての現象世界が、新たな直接の意味内容を開示するのである」と。<sup>(注5)</sup>この論文が一九五一年という時期に、丁度、客観的観察が教育の世界にもほとんど絶対的要請をもって導入されはじめた時に書かれていたことに驚く。客観的観察をどのように評価するかは別に置くとして、存在と存在とが出会うところからはじまる保育において、自らが子どもと交わる中でとらえられる現象を根拠とすることなしに、子どもの理

解は生れない。この論文が書かれて後に、子どもの客観的、科学的な研究は数えきれないほど多くなされてきたが、この著者のような立場でなされた研究はきわめて少ない。

保育界においても、現場で子どもと出会って、さまざまな体験をしている保育者が、自からの体験を根拠とせず、子どもと出会わない客観的研究による理論に頼っていることが多い。現場の保育にたずさわる者は、自分のとりくんだ子どもと保育のできごとを、率直に記し、また語り、その底にある自分の見方を検討することが必要なのではないか。それが保育研究の出発点となる。

「われわれ自身のものである」としての現象世界が、新たな直接的意味内容を開示する」ということは、保育の世界にひきうつして云うならば、こういうことではないだろうか。

ポイテンダイクは、心理学者であり、哲学者であるので、この論文で更につづいて、フッサール、ハイデッガー、ビンスワンガー、シュトラウスなどの著名な現象学者の見解を引いて哲学的考察をすすめているが、ここではこれ以上立ち入らない。

「出会い」という題名で著わされ、自伝的断片という副題をもつ、マルチン・ブーバーによる小さな本がある。ブーバーは「我と汝」という一九二〇年代のはじめに書かれ、大きな影響力をも

った書物の中でも、出会いについての根本的概念を述べているが、「出会い」というこの小さな書物は彼の最後の著作であって生涯の体験の中で印象深い人々との出会いの体験を具体的に記している。その具体的な記述は、それ自体で感動を受けるが、私は保育における出会いのことを考えていて印象づけられたのは、出会いにおける「ゆきちがい」のことである。ブーバーは、これを *Begegnung* (出会い) に対して、*Vergegnung* (ゆきちがい) という語を用いて語っているが、それは母についての記述のところである。幼いときに別れた母と何十年も後に再会したとき、「私は、どこからか、『ゆきちがい』という言葉が自分に向かつて語られるのを聞かずには、彼女の、(注6)相変らずびっくりするほど美しい目を見ることができなかったのである」と彼は記している。この大哲学者の心中を簡単に推量することは控えねばならないが、ここで云われている「ゆきちがい」ということは、保育者と子どもとの間で起るであろうこと、また現に起っていることを、私は考えないわけにいかない。保育者に善意がないわけではなく、しかも、保育者の負っているいろいろの事情のためにゆきちがいが生じるとき、それは人間が互いに負っている運命のようにも思える。それだけに、保育者として子どもにふれるとき、ひとりの人間となつて出会うことができるようにと願うのである。人と出会

うことを望みながら、どうしてもそれができないことが、人間には起るのである。保育者と子どもとの間も、例外ではない。

もうひとつ、出会うことができなくなった体験として、祖父母の農場のお気に入りの「馬」(注7)のことが語られる。その信頼を寄せてくる馬のたてがみによって経験されたものは、「他者、つまり、他なる者のはかり知れぬ他者性」であった。そのとき、馬もまた「重そうな頭をするすともち上げ」わかったという合図を送った。ところがあるとき、「馬をなでながら、急に、それが自分にとってどんなに面白いことか、に気づいた。すると、突然、私は自分の手を感じたのであった。愛撫はいつものように行なわれた。しかし、何かが変わってしまっていた。そこには、もはや、あの他者がいなくなったのである。」そして、次の日に、「この友の首をなでてやったとき、彼は頭をあげなかった。」これと同様のことがまさに保育の中で起る。子どもの行動を面白いと思いい、わかったと思ったりとき、子ども自身は遠く離れてしまっていることがある。子どもとふれるときには、それまでに考えたことはわきにおいて、自分自身を透明にして、子どもと共にいることをつとめる。しかしまた、子どもが去った後には、私共はこの体験を考える作業をはじめ。それは面白い作業であり、理解を深める作業である。しかし、次の日に子どもとふれるときには、それまで

考えたことはわきにおいて、全く新たに子どもと出会う一日をはじめるのである。

注1 L・クラীগス、千谷七郎訳 表現学の基礎理論 P 107—108

注2 保育者が無意識のうちに、出会うことを模索している例として、人間現象としての保育研究2の中の小野英子「子ども

と共なる保育者」(光生館一九七五) P 163—170を参照された。

注3 教育における出会いについては、ボルノー 実存哲学と教育学(理想社、昭和41年)の中で、第五章出会いに包括的な論説がある。

注4 F.J.J. Buytenlijk: Zur Phänomenologie der Begegnung. Rhein-Verlag, Zürich, 1951

注5 前掲書、P 433—444

注6 ブーバー 児島洋訳 出会い——自伝的断片 理想社 昭和41年 P 7

注7 前掲書 P 25—26